

日本気象学会誌「気象集誌」のJ-STAGE 加入について

日本気象学会誌「気象集誌」(Journal of the Meteorological Society of Japan : JMSJ) は1882年に創刊して以来、日本の気象学の基礎および応用、これに関連する大気物理・大気化学などの学術論文を発表する機関誌として、主に国内の会員を対象に刊行されてきました。今日では、英文で書かれた国際誌として広く世界に配布され、気象関連学術雑誌としては、世界で最も古いもののひとつとして評価されています。

近年、気象学や大気科学関連の学術雑誌に掲載される論文数が急速に増大するなかで、読者はより評価が高くサーキュレーションの良い雑誌のみを選択的に購読する傾向にあります。21世紀を迎え、今後、気象集誌が国際的評価の中で生き残るためには、現状の問題点を分析し、絶えず改革のメスを入れることが必要です。国際誌としての気象集誌が海外の読者を増やす努力をしないと、時代の波に乗り遅れて対外評価を落してしまう、という危機感を我々は抱いております。

そこで昨年は、真の国際誌としての位置づけをより明確にする目的で、気象集誌の100%英文化に踏み切りました。日本語要旨を集誌から分離して「天気」に掲載し、雑誌のサイズや表紙のデザインにも若干の変更を加えました。今回の100%英文化は、特にアジア諸国の気象関係者の投稿論文数の急増に繋がっているようです。ちなみに、新しい表紙のデザインは、21世紀の幕開けを記念して日の出をイメージした楕円の太陽を描いたものです。オレンジを背景に地平線から昇る白い太陽は、日いずる国、日本を象徴し、その上の Journal of the Meteorological Society of Japan のグレーの文字は、太陽にかかる雲を象徴し、気象を意味しています。

次の改革の目玉は気象集誌の電子ジャーナル化です。学術雑誌の電子ジャーナル化はアメリカでは相当前から既に開始されており、インターネットで論文を読んだり検索できるようになっています。気象集誌編集委員会が集誌の評価となるインパクトファクターを上げるための議論をしたところ、Web上で集誌を公開してサーキュレーションを上げることが一番よい方法だという結論にたどり着きました。Webで公開すれば、読者の目に触れる機会が増え、引用される機会が増えてインパクトファクターが上がると考えられます。気象集誌の電子ジャーナル化は時代の要請として

当然必要な緊急課題でした。出版業者の入札条件に論文のPDF化を盛り込んで、それをWeb上に掲載するサーバー探しをしているうちに、科学技術振興事業団が運営するJ-STAGEというシステムを紹介されました。J-STAGEとはJapan Science and Technology Information Aggregator, Electronicの頭文字からとったもので、科学技術情報発信・流通総合システムの意味です。

J-STAGEのURLは<http://www.jstage.jst.go.jp/en/>ですが、学会ホームページからも辿れます。ここでは、国の資金的援助を受けて、多くの学協会が発行する学術論文の電子化を支援し、PDF化、SGML化された学術論文を無料でWeb上に公開し、科学技術の情報交換に役立てることを目的としています。電子ジャーナル化に必要なハードウェアおよびソフトウェアはすべて無料で提供されますが、掲載された雑誌は無料で一般公開することが原則になっています。ここに加入しますと、集誌がインターネット上に掲載され、集誌のアイコンをクリックするだけで、世界中どこからでも閲覧が可能となります。論文の検索機能も充実しており、引用文献の検索の他、自分の論文を誰が引用しているかという逆引き情報も提供されています。試しに一度上記URLを訪問してみてください。

J-STAGEではすでに約80の学協会が雑誌の無料公開を行っていますが、逆に言えばそのような時代の流れの中で、閲覧を有料化したり、特殊なブラウザを用いてパスワードを持つ特定の会員にのみ閲覧を許すようなシステムでは、人は読みに来なくなることが明白です。以上の状況を鑑み、気象集誌編集委員会はこの度、常任理事会の承認のもと、著者の立場を第一に考えてJ-STAGEへの加入に踏み切りました。気象集誌に掲載される論文は、多くの人の目に触れ、読まれて初めて意味をなします。著者にしてみれば、読まれてなんぼの論文ですから、Web上で論文が無料公開されれば、検索にも引っかかってサーキュレーションが格段に上がり、インパクトファクターも向上するというわけです。ただし、完全無料化すると、ペーパーで購読しているB-会員の特典が曖昧になりますので、当面は発行から3か月のタイムラグをおいて論文の本文をWeb上に搭載するというを行います。ただし、ク

イトルや著者、英文要旨については即刻掲載します。ある程度の購読者の減少が予想されますが、補助金の増額と購読料や投稿料の増加で不足額を埋め合わせるようになります。予定では、2002年の3月ころから集誌2001年1~6号がWeb上に掲載され、発行から3か月遅れの2002年5月に2002年2月号が掲載されます。そして、その後の購読者数の動向に注意しながら、必要ならばパスワードを設けてアクセス制限を行ったり、逆に3か月のタイムラグを解除するといった変更を行う予定であります。

以上のような雑誌の電子化とWeb上での無料公開といった時代の流れにより、今後集誌は電子媒体が主となり、紙の印刷物は欲しい人のみが購入する付録のようなものになるという将来予測があります。電子化が進むと、Web上をネットサーフィンするように電子ジャーナルの世界を必要な論文を辿りながら読み進めることが出来るようになります。気に入った文章があれば、それをカットアンドペーストにより自分の論文に取り込んで、引用することも容易になります。逆に言えば、電子化されていない雑誌は読まれなくなることです。現在、学会では「天気」の購読者をA-会員、集誌の購読者をB-会員としていますが、電子化で無料公開の時代になると、B-会員という位置づけが無意味になり、単に集誌の購読者という位置づけにな

ります。今後は「天気」と集誌を別に考え、集誌の購読は会員の定義に含めないことになるかもしれません。

気象集誌にかぎらず、「天気」についても雑誌のPDF化とWeb上での一般公開が検討されています。もし、天気についてもWeb上で無料公開となりますと、今度は気象学会員という社団法人格を得た集団そのものの定義が問われる時代がやってきます。学会員の特典としては、情報誌「天気」の購読があり、「天気」をもらうことが会員の明かしのような認識が現時点ではあります。しかし、「天気」を購読しなくてもWeb上で読めるようになれば、会員として「天気」を購読する必要がなくなり、会員であることが意味が曖昧になってしまいます。「天気」については、会員のパスワード認証が必要ということでしょうか。学会員の意見を聞きながら、両編集委員会や理事会レベルの一層の議論が必要です。近年のIT技術の進歩の大波は、「天気」と集誌を取り巻く環境に大きな変化をもたらし、今後、話が急展開するように思います。

以上、今回の気象集誌のJ-STAGEへの加入に是非ともご理解を頂き、国際誌としての気象集誌の今後の発展にご協力下さるようお願いいたします。

気象集誌編集委員長 田中 博